

## 再考：福沢諭吉と演説

——「演説」とパブリック・スピーキング——

平 井 一 弘

福沢諭吉は、英語の「スピーチ」という語を「演説」という日本語に初めて訳した、と言っている。「演説」という日本語は福沢による造語ではなく、福沢以前に日本において使われていた漢語であることは良く知られていることであるが、福沢が、日本ではじめて、「スピーチ」にこの訳語を与えたのであるかどうかの確証は未だ無く、ただ福沢が書き残したものを信ずる他はないようである。この訳者が福沢であれ他の人間であれ、「西洋流の演説」を日本に導入し、これを広めたのは福沢であるとは一般的に合意されているように思われる。福沢自身この言葉を使っている<sup>(1)</sup>、また、福沢が「演説」という訳語を、「スピーチ」にあてはめたということを疑問視する人々も、福沢を「西洋流の演説」の日本における紹介者とすることに疑いは持たないようである。

しかし、福沢が日本に導入した「西洋流の演説」とは、正確には何を意味するのであろうか。それが西洋流のレトリックではないことを、私はすでに論じた<sup>(2)</sup>。また、福沢は、文明の発達のために、今日の言葉を使えば、コミュニケーションを重視していたことをも、私はすでに論じた<sup>(3)</sup>。

福沢は「演説」という語を種々の意味で使用しているが、その原語である‘speech’をどのようなものとして理解していたのであろうか。福沢の「スピーチ」観を論ずる場合に、私達は次の二つの誤りを犯しやすすくないであらうか。すなわち、第一に、明治初年以降に使われるようになった「演説」という日本語、あるいは「スピーチ」という借用語の意味から類推して、福沢のスピーチ観を考えること、である。第二に誤りやすいことは、今日の西欧的スピーチの思想から、福沢の「スピーチ＝演説」思想を、直接的に類推し、福沢を、言論を重視した民主主義者として事足り、とすることである。第一の誤りを犯せば、福沢が考えた「西洋流の演説」を正しく理解することの妨げになるし、また、日本社会における演説の意味が、西欧社会におけるそれと同等であるという誤解の源となる。第二の誤りを犯せば、明治時代初期の日本において福沢が「演説」に込めようとしていた思想的、実践的な意味を正しく理解する妨げになるであらう。

私は、福沢の「スピーチ」観は、単なる演説、討論をめぐるだけのものではなく、その近代的コミュニケーション観の一部をなしていると考えている。本論文は、福沢のスピーチ観は、西欧的な‘public’の観念に基づいた、パブリック・スピーキング（コミュニケーション）のそれであるとする立場から、先ず、(1)幕末より明治初年に至る「演説」という語の意味を概観し、次に、(2)福沢のスピーチ観を検討し、最後に、(3)福沢のスピーチ観の近代性を、「衆論」との関係において論ずる。

### 「演説」の意味

「スピーチ」という英語を「演説」なる日本語に訳した最初の人間が福沢諭吉であったとしても、「演説」なる日本語がすでに福沢以前に使われていたことは知られている。斉藤毅<sup>(4)</sup>は武家ことばとしての「演説」の用例を調べ、「いずれも、公式の場所で威儀を正し、折目正しく物をいい、或いは文言で説明することのようであり（後略）」と言う。石井研堂<sup>(5)</sup>は次のように述べてい

る。

(前略)この二字「演説」は、もと仏者の常套語なるべし、それを、西洋流のスピーチとなせるは、徳川幕府瓦解の寸前に、開成所員が西軍の東下に対し、攻勢を取るべきや、又守勢を取るべきやを會議して決したく、慶応四辰年正月十四日に、之を催はしたるを租とし、明治の初期に、福沢氏の一団が之を研究修練して、普及せしめ、始めて軌道に乗り上げしものなり。

石井がここで「西洋流のスピーチ」と言っているのは西洋流の會議法のことであるようである。この會議は神田孝平の立案になる會議法則によったものであり、その第五条に、「演説方〔議長〕は右書面を請取り、文意を熟覽し、不審の廉あらば承糺し、明瞭に理解すべし」、また第六条には、「次に演説方右書面を高声に読上げ衆中に聞かしむべし」とある<sup>(6)</sup>。以上が幕末の洋学者の演説観であるが、ここでは「演説」と「會議」が切り離せないものであった。

西村茂樹は英語の「スピーチ」あるいはオランダ語の「レーデフーリング」が何を意味するのか知らなかったが「米人浦賀ニ來ルノ後、英学の端緒ヲ開キ、始メテ『スピーチ』ナル者ハ公衆ノ前ニテ公言スル所ノ方、今ノ所謂演説ナル者と云フ」事を知ったと述べている<sup>(7)</sup>。

また上記の會議法としての「演説」から推測されるように、「演説」には、公衆の前で話をするだけでなく、そうする時に原稿を読む、ということをも意味していたようである。斉藤<sup>(8)</sup>はこのことを、福沢の言および明治初年における「演説」という語の使用例から強調している。

(前略)武家階級の使っていた演説ということばに、今日の演説の実体と内容を持ち込んだのは、やはり福沢とその一党であった。福沢は、前述の『會議弁』のなかで、演説の実体は、最初は「口<sup>1</sup>に弁ずる通りに予め書に綴り、仮りに活字印刷に附して、之をそのまま述べんと試みたるもの」であったと述べているが、このような演説の仕方は——というよりは公衆の面前でのしやべり方は——福沢をまつまでもなく、すでに多くのひとたちによって、必要に迫られて、行なわれつつあった(強調は斉藤による)。

斉藤はこれに続けて、国会開設に先立つ種々の會議で「演説ということばこそ使われてはいなかったが、あらかじめ原稿を認めそれを公式の席で読み上げるというしやべり方がさなれたことは、つぎの諸例であきらかである(強調は斉藤)。」として明治元年から8年にわたる、演説という語の使用例四つを挙げている<sup>(9)</sup>。

上記の記述から、幕末から明治時代の初期にいたる「西洋風」演説とは、形式的には、一人の演説者が會議において、あるいは公衆の前で説を述べることであり、その際には、演説者は草稿を読むという「話し方」をすることが一般的な演説の仕方であったと推察できる。また同時に、斉藤は、このような演説、すなわち、基本的には今日でも「演説」が意味しているところのものが、福沢が唱導した西洋流の演説であると理解していたことがわかる。

さらに、武家ことばとしての「演説」と明治初年の「スピーチ」の訳語としての西洋流のそれとの内容的差異は、演説が行なわれる場所および演説にかかわる人間の問題として、上記斉藤からの二つの引用に示されているが、両問題とも「公」という文字の使用に関係している。武家ことばの「演説」は武家社会における武士の公式のコミュニケーションという「公」であり、訳語としての「演説」は「公衆の前ニテ公言スル所ノ方」であり、その意味は、一般的には、一人の人間が大勢の聴集に向って思想を述べることである。しかし、特に「公」が意味することを問題にすれば、武家社



会という「公」が崩壊した後の明治の人々の「公」意識を論じなければならない。ここでは、福沢が「演説」を用いて、日本人の間に涵養しようとしたものは、国家という「公」と対峙し得る、「パブリック」としての「公」であったであろう、ということを示すにとどめる。

ちなみに、今日の日本語の「演説」の意味は、『広辞苑』によれば、‘speech’の訳語としての「演説」は、「多くの人々の前で自分の主義・主張や意見を述べること」である。これは齊藤がえがいた明治の演説の姿でもあるが、今日では「一席演説をぶつ」などのからかいの言い方を除いては、「演説」はテーマの限定をとめない、政治演説を意味しているように思われる。

最後に、『会議弁』に関して上に引用した齊藤の記述は、いくつかの点で正確さを欠いているので、ここに訂正をする。第一に、齊藤の記述中、『会議弁』とされているものは、「福沢全集緒言中」で福沢が『会議弁』の成立事情を述べた個所である。第二に、「口に弁ずる通り云々」は、福沢が一般的に勧めた演説の方法ではなくして、「福沢全集緒言」中に記録されている「明治七年六月七日集会の演説」に関してのみ福沢が述べていることである<sup>(10)</sup>。福沢および他の三田演説会員は、原稿を読むという「話し方」を勧めてはいない。むしろ、「読むこと」ではなく「話す」ことを奨励したと思われるような記録が見られる。例えば、「前回の設題に答る銘々の説を覚書に記し之を弁論すべし」と決められたという記録がある<sup>(11)</sup>。また福沢晩年（明治二十年代終りから三十年代）の演説がいくつか口語のままに残されているが、これは原稿を読んだものではないことは明らかである。事実、そのうちで、「法律と時勢」と題された学生に対する演説（明治31年）の「原稿」とされるものが残っているが、これは、文語体で書かれた演説草案（アウトライン）であって、草稿そのものではない<sup>(12)</sup>。

### 福沢による「スピーチ」の観念

以上日本における「演説」が、明治時代より、恐らくは今日に至るまで、一人の人間が多数の人間より成る聴衆に向って、その考えを伝えるという行動形態を意味しており、多くの場合に、演説とは草稿を読むことを意味していたこと、を述べた。福沢の「スピーチ」の観念の中にこの種の演説が含まれていたことは確かであるが、それに限られておらず、福沢は形式的にも機能的にもより大きな「スピーチ」観を持っていたと思われる。その観念とは、今日の言葉では、パブリック・スピーキングと呼ばれるものであり、形式的には、ある「体裁」を備えた話し方を、そして機能的には、文字通り、‘private’に対する‘public’なコミュニケーションを意味していた。以下に、福沢の「スピーチ」の観念を論じ、次にその形式と機能について詳論し、最後に福沢がスピーチに見ていたであろう重要性を推測する。

福沢は「福沢全集緒言」（明治31年、以下「緒言」と省略）において『会議弁』（明治6又は7年）の成立事情を回想して、『会議弁』は「スピーチ」の大概を記した、英語の小冊子の大意を訳したものであると述べている<sup>(13)</sup>。そして、この翻訳の苦労話として、「演説」という訳語にいたるまでの苦心が語られ、また「デベート」は「討論」と訳したことに触れられているが、これら訳語の問題はあくまで付随的に述べられているにすぎないことに注意をしたい。

「緒言」中上述の個所における福沢の記述から、『会議弁』は西洋のスピーチの書の翻訳であると福沢は主張しているように読める。これとはほぼ同様なことは、「緒言」よりはるかに早く書かれた「慶応義塾紀事」（明治16年）<sup>(14)</sup>にも述べられているし、これに関連することは、「三田演説会第百回の演説」（明治10年）<sup>(15)</sup>でも語られている。従って、『会議弁』は、明治の初年より30年すぎに至るまでの、福沢による「スピーチ」という英語の解釈の全体、あるいは少なくともその主要な部分はあらわしていると考えて正しいだろう。



福沢は西欧社会における「スピーチ」をどのようなものだと解釈していたのであろうか。第一に、『会議弁』自体がその解釈の結果であるとする、『福沢論吉伝』において石河が述べているように<sup>(16)</sup>、あるいは『慶応義塾百年史』(上)において述べられているように<sup>(17)</sup>、さらには、先に触れた「三田演説会第百回の演説」から推測されるように<sup>(18)</sup>、福沢にとって「スピーチ」とは「演説・討論」であった。事実『会議弁』には、演説、討論の場面がある。しかし、福沢の「スピーチ」の観念はそれだけではなかった。『会議弁』という会議運営法のもとに進められる会議というスピーチ・コミュニケーションそのものが福沢の考えた「スピーチ」であったように思われる。福沢全集の『会議弁』で見ると、「演説」という言葉は、文字通りの演説を意味するものとして、わずかに二回使われているだけであるし、「討論」にいたっては、私の勘定がいでなければ、一回も使われていない。すなわち、これは演説や討論の書物ではない。『会議弁』は、今日のスピーチ・コミュニケーション(学)の観点よりすれば、グループ・コミュニケーションの一部としての会議運営(進行)手続(parliamentary procedure)を記した書物である<sup>(19)</sup>。

会議運営手続には、当然のことながら、演説も討論も含まれるが、それらを会議としてまとめる手続きがさらに含まれている。すなわち、福沢のスピーチの観念の中には、演説、討論だけでなく、会議運営も含まれていた。これらをひっくるめて、福沢は、「集会談話の体裁」<sup>(20)</sup>と呼んだのであろう。

しかし、この幕末の演説観との類似性を越えて、福沢が「スピーチ」、従って、その訳語としての「演説」に付与した意味は、より広い意味を持ち、いわば「まとまりのあるオーラル・コミュニケーション」と呼べるようなものであったように思われる。この広義の観念は「明治七年六月七日集会の演説」<sup>(21)</sup>において明らかにされている。この演説で、福沢は「西洋風の演説」を稽古する理由を五つ挙げ、その第一と二は、学問の伝播、第三に、儀式的な機会に大勢の人々に向って改まって口上を述べられるようになること、第四に、婦人、子供もきちんと話しができるようになること、第五に、議院等で議論ができることである。

確かに、福沢の「演説」の主要な意味として、公衆を前にして所論を述べる学術、政談演説があったことは明らかであり、福沢の演説を論ずる人々の多くは、後に見るように、知識伝播の手段としての演説と、国会等の議会演説の勧奨とを論ずる。しかし、ここで強調したいことは以下のことである。すなわち、福沢の「演説」には、儀式での口上、あるいは婦人、子供の正しい話し方に代表されるような、人々が社会的に結びつく手段としての「演説」、すなわち、一定の形式と内容に保証される西歐的なパブリック・スピーキングの意味が込められていたのであり、特に、今日においては、スピーチ・コミュニケーションの研究者の多くでさえ必ずしも明確にしているとはいえない「パブリック」の概念が強く意識されていた、と推測されることである。

福沢による「演説」(＝スピーチ)の定義は『学問のすゝめ』第十二編の冒頭に見ることができる。「演説とは英語にて『スピーチ』と言ひ、大勢の人を会して説を述べ、席上にて我思うところを人々伝ふるの法なり。」<sup>(22)</sup>そして、西洋諸国でスピーチがなされる大勢の人の会する機会として、「政府の議院、学者の集会、商人の会社、市民の寄合より冠婚葬祭、開業開店の細事に至るまでも、僅か十数名の人を会すること<sup>(23)</sup>」を挙げている。さらに、そこで話される内容を、「その会につき、或いは会したる趣意を述べ、或いは人々平生の持論を吐き、或いは即席の思い付を説きて、衆客に披露するの風なり。」<sup>(24)</sup>とする。ここには今日の日本語で演説とは呼べないものがほとんどであり、先に見た幕末、明治初年の「演説」の概念にも含まれないものである。但しこれらは全て、英語のスピーチ、すなわち public speaking に含まれるが、その理由は、おそらく、発言内容が全て public であり、かつそのために一定の「固苦しい」形式を備えているからである。特



に、福沢が「即席の思付」を挙げていることに注意しよう。「即席の思付」がスピーチになるのは、それが private なものではなく、まさに社会的 (public) なものの場合である。つまり福沢にとっては、「即席の思付」でもそれが「衆客に披露」されてパブリックなものとなる場合は、スピーチであった。<sup>(25)</sup>

### 「スピーチ」の形式と機能

次に、「スピーチ」の形式についてであるが、福沢は単に「大勢の人を会して説を述べ」という外面的な形式以上に、話し方の体裁 (内的な形式) と言えるようなものをも「演説＝スピーチ」の要素として示唆している。福沢は同じく第十二編中で、「演説をもって事を述べればその事柄の大切なると否とは姑く擱き、ただ口上をもって述ぶるの際に自ずから味を生ずるものなり。譬えば文章に記せばさまで意味なきことにて、言葉をもって述べればこれを了解すること易くして人を感じせしむるものあり。」<sup>(26)</sup> として、話し言葉の「味」を「人を感じせしむるもの」とする。さらに、「尋常の文」に訳された場合の詩歌とその元の詩歌を比較し、「詩歌の法に従ってその体裁を備うれば限りなき風致を生じて衆心を感動せしむべし。」<sup>(27)</sup> とする。そして最後に、速やかに意志の伝達を行うには、書き言葉ではなく話し言葉を用いるべきであると言う。ここでは文章と話しが、「味＝感動」をめぐる対比され、さらに、同じ「感動」をめぐる、「尋常の文に訳された詩歌」と元の「詩歌」が対比されている。対比される基軸は同一であるからして、文章が、訳された詩歌に、話しが、詩歌にたとえられているとの類推を成立させるとすれば、詩歌がその法に従ってある体裁を備えているから人を感動させるように、話しもある体裁を備えることによって人を感動させると福沢が示唆していることになる。このように、体裁を備えた話しが「演説＝スピーチ」であると福沢が考えたとすれば、この考えは、英語のスピーチ (public speaking) の概念と一致する。すなわち、体裁を整えなくともすむ話し方は日常 (private) の話し方であり、‘public’ な話し方がある体裁を整えていなければならない。伝統的には public speaking の体裁をレトリックと呼ぶ。

形式に関してもう一つ、この第十二編から読み取れることを述べる。これも文献的に断定ができるわけではなく、ただ推測が可能であるということである。福沢は学者が会得すべき術として、智見を集めるものとして視察、推究、読書を、智見を交易するものとして談話を、さらに智見を散ずる術として著書、演説を挙げ、「然り而してこの諸術の中に、或いは一人の私をもって能くすべきものありと雖ども、談話と演説とに至っては必ず人と共にせざるを得ず、演説会の要用なること、もって知るべきなり。」<sup>(28)</sup> とする。ここからは、「私」すなわち ‘private’ なことと、「人と共に」すること、すなわち ‘public’ なことを、福沢が区別していたことが推測でき、かつ、演説、談話 (スピーチ) をそれが ‘public’ なものであるゆえに重要視していたと考えられる。

また、福沢は、一人の話し手が大量の聴衆を前にして一定時間話しをするという ‘public speaking’、あるいは演説の形式を破ったところでも、話しが ‘public’ なものであるのならば、演説だと考えていたことを示す文書がある。この文書は先に触れた「明治七年六月七日 集会の演説」である。この中で福沢は、演説の便不便を論じ、演説は学者のみが心得ていれば良いというものではなく、婦人子供もその心得を持たなければならない、と言い、「其証拠には一寸よその家に行き、其内の下女に口上を取次がせてごらんなさ。いつでもまちがわぬことなし。畢竟この下女などは口上を聞いたこともなく、のべたこともないからでござりましょう。」<sup>(29)</sup> と結んでいる。ここで福沢は演説という語を、下女の口上にまであてはめているが、その理由は、客の口上を下女が取次ぐという、社会生活 (public) の場において有効なコミュニケーションができるようになること



を、演説の便として考えていたからであろう。日本語の「演説」はもとより、英語の、狭義のスピーチ (public speaking) にも、このような口上は含まれない。しかし、広義に、スピーチを 'public speaking', パブリック・コミュニケーションと考え、その 'public' を文字通り「社会生活上の」、との意に解すれば、福沢のスピーチの観念の中には、'public communication' が含まれていたと云えそうである。

福沢諭吉は西洋流の「演説」に注目をしてそれを日本に広めた。なぜ福沢はこのようなことをしたのであろうか。一般にこのことは以下の二つの機能のため、として論じられているようである。第一の機能は、「知識の伝達」と関係づけられる。すなわち、書き言葉よりも有効な知識の伝達の方法としての、話し言葉による「演説」として、<sup>(30)</sup> 福沢自身もこのことを強調している。第二の機能は、国会の開設と関係づけられる。すなわち、福沢は、明治初年に、早晩議会が開設されるであろうことを見越して、雄弁な議員をそこに送るために演説の練習を行った、とするものである。<sup>(31)</sup> これもまた福沢の残した文書に見られる。

知識の速かな伝播を期待して福沢が演説を奨励したことは疑い得ないし、雄弁なる議員の養成そのものを、福沢自身がどの程度真面目に考えていたのかは私には不明であるが、その文明社会論から、福沢が「演説」と議会をある程度は結びつけて考えていたであろうとは推測できる。しかし、福沢の「演説」観を、知識の伝播と議会人の養成に限定することは正しくない。もしこの限定の傾向が見られるとすれば、その理由の少くとも一つは、日本において「演説」という語に与えられてきた意味と関係するように思われる。すでに論じた通り、明治の初年から今日に至るまでの「演説」の意味に従えば、「演説」とは、その内容 (学術、政談等) と形式 (一人が大勢の聴集に向って) にはほぼ限定されるのであるから、多くの人は、福沢が「演説」の機能を、知識の伝播と議会人の養成に限定していたと考えやすいのであろう。

福沢がそれを「演説」と訳した 'speech' は、従って福沢の演説観の主要部分は public speaking を意味することは既に述べた。西欧でパブリック・スピーキングの名のもとに定着し、日本で演説の名のもとに、未だ十分に定着していないものは何であろうか。私は、その最大なものの一つは、パブリック・スピーキングの「説得」 (persuasion) の機能ではなかろうかと思う。説得は古代ギリシア以来のスピーチの最重要な機能であるが、西欧において近代的市民社会の「個」の意識が確立されてゆくにつれ、人間がパブリックに結びつくためには、説得が大きな役割を果たしたであろうことは容易に想像される。ところが、明治の初年、福沢は「演説」にこの説得機能を認めていたように思われる。私の考えでは、教育者としての福沢は、当時の日本人に演説を勧めることによって、西欧的な「パブリック」を創出しようとしていた。ただし、そのことをどの程度明確に意識していたのかは不明である。しかし、福沢の思想の中心に、「政府」とバランスをとって存在すべき「人民」があり、そのような人民のリーダーの育成が福沢の教育であったとすれば、その教育には情報伝達のみならず説得が重要であったろう。

西欧におけるパブリックとコミュニケーションの関係を以下に見る。妹尾<sup>(32)</sup> はホッブズとロックおよびそれらの社会契約論について次のように述べる。

ホッブズとロックは、人間の間に市民社会が作り出されるのは、自然状態にいる個々の人間が、互いに対等な人間として、社会を作るという契約を交すことによってであると考えた社会契約論者であった (中略)。

人間が社会契約を交して社会を作るためには、契約を交すそれぞれの個人が積極的に社会を作ろうとしていなければならない、しかもその社会が永続するためには、それぞれの人間が自分の

中で（中略）自然法を受け入れて、この自然法を基にして、社会契約を立てて、この契約を行なうだけのコミュニケーションの主体に成熟していなければならない。

上記引用中の「社会」が「パブリック」としての社会である。三戸<sup>(33)</sup>は、パブリック概念に関する西欧と日本の差を以下のように論ずる。

独立した個人がプライベートなものをあくまで守り、皆に共通の部分は誰でも自由に入出入りし、誰でも自由に入出入りする場がパブリックな場所であり、パブリックの部分は皆が負担するのが欧米である。パブリックの部分のために税金を支払い、その税金でパブリック・サービスがなされることになり、パブリック・サービスをする人間がパブリック・サーバントである。これにたいして、日本人は、国家という家に所属しており、欧米人と同じ意味においては独立した存在ではない。国家はお上であり、お上の仕事をする人間はお役人であり、税金は国民が自発的に納め支出するものではなく、徴収せられるものであり、取られるものである。

福沢が「スピーチュ」の機能を、説得的なコミュニケーションに基づくパブリックの養成に求めていることは、次の二つのことから推測される。一つは、「演説」の習得を通して高尚な人間（積極的に社会を作る個人）を養成することを考えていたことであり<sup>(34)</sup>、他は、そのような場として、西洋のディベティング・ソサエティにならって「三田演説会」という討論、すなわち説得的コミュニケーションの練習会を組織したことである。さらに、『会議弁』という「スピーチュ」の書物にあらわれている思想は、上に三戸が言っているような意味でのパブリックな説得であり、従って、同書中、国家（お上）に依存しようとする、腰野拔太なる人物の発言は否定されている。

私は、福沢の「演説」が「西欧的」である理由は、それが形式的、内容的に、明治以前のそれと異なり、「西洋風」になっていたというものだけではなく、福沢の社会思想自体が近代市民社会的なものであり、従って、個人をつなげるものとしてのコミュニケーションに関する福沢の思想が西欧近代社会的なものだったからである、と考える。

### スピーチの重要性の認識

福沢は西欧社会に於いてスピーチが重要な役割を果たしているとは認識していたが、いかなる意味でそれが重要であるかという説明は、大変興味深いことに、福沢がスピーチを奨励した文書にはあらわれない。これらは、ただ、西欧社会におけるスピーチの重要性を述べているだけである。その理由の説明は、『文明論の概略』を見なければならない。まずスピーチを奨励している文書を年代を追って見ることにする。

まず、『会議弁』の総論は、「凡そ西洋諸国に於ては、人間百事、公私を問はず、皆この集會に由て決を取るの風なり」<sup>(35)</sup>と、西欧社会における集會とそこにおけるスピーチの重要性が指摘されているだけである。さらに、『学問のすゝめ』第十二編（明治7年）「演説の法を勧むるの説」は、すでに見たように、西欧社会における「演説」の種々の機会（議會から開業の細事に至るまでの）を挙げて、「この法の大切なるは固より論をまたず。」<sup>(36)</sup>としているだけである。

時代が下って「慶応義塾紀事」（明治16年）には『（前略）西洋諸国には「スピーチュ」の法あり（即ち今日の演説なり）、学塾教場の教のみにては未だ以て足れりとす可らず、「スピーチュ」「デバート」（討論）の如き、學術中最も大切なる部分なれば、比法を我國に行はれしめては如何との相談にて（後略）」<sup>(37)</sup>と言っているのみである。さらに時代が下って、「福沢全集緒言」（明治31



年)で、福沢は『会議弁』の成立事情を以下のように語っている。

(前略) 明治六年春夏の頃と覚ゆ、社友小泉信吉氏が英版原書の小冊子を携えて拙宅に來り、扨云うよう、西洋諸國にて一切の人事にスピーチュの必要なるは今更言うに及ばず、彼國に斯くまで必要なる事が日本に不必要なる道理はある可らず(後略)。(38)

上記引用では「演説の法を勧むるの説」と同様に、スピーチの重要性が、学術上のみならず、社会生活全般との関係で認識され、強調されている。しかし、この重要性について小泉や福沢が明治6年に「今更言うに及ばず」と断言できるほどの根拠のある確信を持っていたとはほとんど信じがたい。というのは、その時代にスピーチが重要である理由が、ましてや一切の人事にそれが必要な理由が、当時の第一級の学者にも理解されていたとは思えないからである。

例えば福沢と共に明六社を起した、当時の第一級の知識人である西村茂樹は「開成校講義室開院ノ時ノ演説」(明治10年)において、大略次の意味のことを言っている。すなわち、米人が浦賀に來てから、スピーチとは演説なのだということは解ったが、この演説なるものが何故に人間交際(社会)に利益を与えるものであるのかは知らななかつた。後5、6年して、演説が社会に重要であることが理解されるようになり、学士の演説が多くなり、ついに、この講義室を開くことになった。(39)ここで西村は学術情報を伝達する演説について述べているのであろうが、今日では自明と考えられている、コミュニケーションのこの働きさえ、当時は、その社会的な意味が学者自身によってさえ理解されていなかった。福沢とその社中が西村より鋭敏であつたとしても、「西洋諸國にて一切の人事にスピーチュの必要なるは今更言うに及ばず」と断言できるだけの根拠のある判断が当時あつたとは信じられないことである。当時ばかりではない、今日でさえも、一社会における、ましてや一社会の発展におけるコミュニケーションの重要性などは簡単に理解できるようなものではない。

しかし、この「重要性」こそ、福沢が「スピーチ」に付与していた重要性であつたように思われる。私がここで問題にしようとしていることは、西欧社会におけるコミュニケーションの重要性を、福沢が、なぜ、どのようにして、かほどの自信を持って断言できるほど強烈に、認識しえたのかということである。

福沢は、『会議弁』を書く以前の三度にわたる欧米体験において、欧米社会とスピーチの関係を、筋道立てて説明できるような知り方ができたのであろうか。そのようには思えない。明治6年以前に福沢が著述したもので、演説、討論等スピーチに関するトピックを含んでいる主なものは『西洋事情』(初編、慶応2年;外編、明治元年;二編、明治3年)および『英国議事院談』(明治2年)であるが、前者において西欧諸國の歴史、政治を論じた箇所、および後者では、議會とそこでの弁論に触れられてはいるが、それ以上の記述はないようである。

丸山が指摘するごとく、福沢は「會議」「演説」という語をパブリックの觀念と関連させていた。(40)おそらく、福沢は欧米社会の体験を通して直接的に、また欧米の書物の勉強を通して間接的に、西欧社会とパブリック・スピーキングの関係を理解したのであろう。しかし、その理解の仕方は、ほとんど直観的と言えるほどの鋭敏さによるものではなかつたかと思われる。以下に、福沢が大きい影響を受けたフランソワ・ギゾーとヘンリー・トマス・バックルに触れておく。福沢がこれらの歴史家の著述を勉強したことは、福沢の演説観に何らかの寄与をしていないであらうか。

ギゾーの『ヨーロッパ文明史』にヨーロッパ社会とスピーチの関係が明示されているわけではない。しかし、次のことに福沢が気がついていたという証拠を私は知らないが、フランソワ・ギゾー



は、19世紀フランスの有名な弁論家であり<sup>(41)</sup>、事実、『ヨーロッパ文明史』は講義録であるが、その講義がヨーロッパの弁論術（レトリック）のお手本となるようなものであったことは、その日本語訳<sup>(42)</sup>からも十分に察することができる。福沢はこの英語版を読んだのであるが、そのメリハリの利いた語り口を觀賞することは、西欧レトリックの知識が福沢に無くとも、可能であったはずである。

福沢はギゾーからと同様ヘンリー・トマス・バックルの『イギリス文明史』からも多くを学んだ。パブリック・コミュニケーションとしてのスピーチの持つ社会的な意味に関して福沢がバックルから学んだことが多いことは、次節に見るように、明らかである。バックルは、生涯において浩瀚な『イギリス文明史』のみを著述し、ここに、人間精神、文明および社会の発達史を述べることに全精力を献げたと言われているが<sup>(43)</sup>、当然なことに、バックルも当時のイギリスの社会学的背景の中に位置づけられる。そしてこの背景は、今日の社会心理学、ひいてはコミュニケーション理論の基礎である。以下の、社会心理学者の記述は<sup>(44)</sup>、この背景とその中におけるバックルの位置を示している。

〔イギリスでは心理学、社会学理論は、個人中心的、自由放任主義的なものが主流であったが〕もちろん、十九世紀後半のイギリス心理・社会思想の背景には、ヒューム（Hume）の『人性論』（*the Treatise of Human Nature*, 1729-1740）にみるような社会結合力としての共感の分析があり、ヒュームと同系列のものとしてアダム・スミス（Adam Smith）の『道徳情操論』（*The Theory of Moral Sentiments*, 1759）という著名な論著がある。ヒュームもアダム・スミスも、結果的には、現代社会-心理学の発展史にきわめて重大な位置を占めている。また、これに関連して、バックル（Buckle）が『イギリス文明史』（*History of Civilization in England*, 1857-1861）で地理学や統計学を用いて社会の発展という問題を考察したことも注目される。さらにコント学派の思想の影響もみすごせない。これはおもにミル（J.S. mill）やルイス（G. H. Lewes）をとおしてイギリスの功利主義哲学や倫理学における実証的・社会的モチーフの中にみられる。

以上で注目したいことは、福沢が西欧近代の思想、科学を吸収する過程において、古代ギリシャから今日まで存在しているパブリック・スピーキングの思想と近代的コミュニケーションの思想を身につけたのかもしれないと思われることである。

#### 衆論とパブリック・コミュニケーション

福沢が「演説」を勧奨した文章においては、西欧社会における「演説＝スピーチ」と社会の関係は説明されておらず、ただ西欧社会では演説は重要であると断定されているのみであり、福沢によるその関係の理解は、福沢の西欧近代思想の受容に求められるであろう、とのことを以上に述べた。

『学問のすゝめ』第十二編や『会議弁』とはほぼ同じ時に書かれた『文明論之概略』（明治7年）には、「衆論」と文明化の関係がかなり詳細に論じられている。『文明論之概略』を著述するにあたって福沢が大いに参考にした原書は、トマス・バックルの『イギリス文明史』であり、後者中には‘public opinion’という言葉が使われているので、「衆論」とはその訳語であると思われる。福沢はこの衆論を形成する方法として、「演説」すなわち public communication を重要であると考えた。

福沢は「スピーチ」を二つの意味で「衆論」の形成過程に関係づけていたように思われる。一つ

は、オピニオン・リーダーのコミュニケーション上の役割であり、他の一つは、一社会内の人間同士が結びつく方法として、である。だがこの二つのことを論ずる前に福沢が「衆論」をどのようなものであると考えていたのかを明らかにしなければならない。

「衆論」を論ずるためには、それが論じ得るもの（規則性を持つもの）であることを確定しなければならないが、福沢は『文明論之概略』（以下『概略』と省略）第四章「一国人民の智徳を論ず」において、「人の心の働き」は個人によってあるいは時代によって千差万別であるが、これをある時代のある地域の人々の心の動きとして考えれば、一定のものとして見ることができる、とする。<sup>(45)</sup>これは福沢が『概略』を著述するにあたり大いに参考にした、ヘンリー・トマス・バッケルの『イギリス文明史』の考え方であった。『イギリス文明史』の簡約版への序文を書いたハンス・コーン（Hans Kohn）<sup>(46)</sup>によれば、バッケルは人間の行動、従って社会の動向は偶然の結果でも超自然的な力によるものでもなく、物理学の法則と同じようなある一定の法則に従うと考えた。福沢はこの社会の法則性をバッケルに学んだようである。福沢は智徳の法則について以下のように述べる。

今一身一家に就て其人の働きを察すれば更に規則の存するを見ずと雖ども、広く一国に就てこれを求めば其規則の正しきこと彼の晴雨の日数を平均して其精密なるに異ならず、某の国某の時代には、其国の智徳この方向に赴き、或は比原因に由て比度に進み、或は彼の故障に妨げられて彼の度に退きたりと、恰も有形の物に就て其進退方向を見るが如し。<sup>(47)</sup>

さらに、文明と智徳を関連させ、「世の文明は周ねく其国民一般に分賦せる智徳の現象なれば、其国の治乱興廃も亦一般の智徳に係るものにて、二三人の能する所に非ず。」<sup>(48)</sup>と言う。そして、福沢はこの考えに基づき徳川幕府の倒壊と明治維新を分析する。すなわち、その原因は「王室の威光に由るに非ず、執政の英断に由るに非ず、別にその源因なかる可らず」<sup>(49)</sup>として、王室の威光や執政の英断が、例え近因となったとしても、それとは別に遠因（真の原因）があるとし、それは、日本人民の智徳の発達であり、それが潜在していたものがペリーの渡来を「好機会」<sup>(50)</sup>として、衆論として顕在化した結果、明治維新という革命が起きた。これは、バッケルのイギリスの政治の論じ方とはほぼ同一である<sup>(51)</sup>。

このように、福沢はバッケルにならって、社会現象を法則として捉えようとし、その一部として日本人全体の智徳の発達を法則的に理解できるものとして考え、そのある発達段階で衆論として結果し、明治維新という社会現象を引き起こしたと考えた。それでは福沢が考えた衆論と「演説」の関係はどのようなものであったのか。その特徴が二つ、同書第五章で論じられている。

(1)「衆論は必ずしも人の数に由らず、智力の分量に由て強弱ありとのことなり。」<sup>(52)</sup>

(2)「人々に智力ありと雖も習慣に由て之を結合せざれば衆論の体裁を成さずとのことなり。」<sup>(53)</sup>

上記(1)(2)ともに衆論の形成過程の特徴と関係する。(1)は衆論形成におけるリーダーシップの役割にかかわる。福沢は、「中人以上の智者」が議論をして、いわば勝ち残った意見が衆論となると考える。中人以下の者は衆論形成に積極的に参加するのではなく、「他の愚民〔中人以下の者〕は唯其説〔衆論〕に雷同し其範囲中に籠絡せられて敢て一己の愚を逞ふること能はざるのみ。」<sup>(54)</sup>である。このように、智力のある者が議論をたたかわせ、勝ち残った意見が衆論となるが、その議論をたたかわせる場所として「新聞紙演説会」が西欧では盛んである、と福沢は考える。

以上からだけ見ると、衆論とは、ある社会の最も智力のある一人の人間の意見であるとする社会ダーウィニズム的傾向をあらわしており、智力が中人以下の「愚民」は、優秀な意見に圧倒されて愚論を吐かないという形でのみしか衆論形成に参加しないことになるが、福沢は、必ずしもそのこと



のみを考えていたのではなく、また中人以上の智力を持つ者の協力による向上と、そこから生ずる世論が「愚民」を導くという、教育機能を考えていた。

上記(2)は、人々の智力と衆論の関係について述べている。福沢は人々の智力が結合されなければ衆論にはならないと考える。これを結合させるものがコミュニケーションであり、コミュニケーションを促すものが習慣である。このことを以下に論ずるが、そのためには『学問のすゝめ』第十二編に戻らなければならない。先ず、第十二編が刊行されたのが明治7年であり、この年に福沢は『概略』の執筆を思い立ち<sup>(55)</sup>、これが刊行されたのが明治8年であるという、両書の同時性を指摘しておこう。

すでに触れたように、第十二編において、福沢は、西洋諸国における演説の役割を論じて、政府の議院から開業開店にいたるまで、人が集れば演説が行なわれると述べ、「この法[演説]の大切なところは固より論をまたず。」と断定し、その理由として、「譬えば今世間にて議院などの説あれども、仮令院を開くも第一に説を述ぶるの法あらざれば、議院もその用をなさざるべし。」<sup>(56)</sup>とした。ここでは「演説」はある方法に基づかねばならないということが強調されているのみであって、「演説の法」がなぜ重要であるのかという社会理論上の説明はない。「演説の法」の一部であろう「仲間」という概念は第十二編でも展開されているが、『概略』においても、西欧における「仲間」が重視されている。

国内の事務悉皆仲間の申合せに非ざるはなし、政府も仲間の申合せにて議事院なるものあり。商売も仲間の組合にて「コンペニ」なるものあり。学者にも仲間あり、寺にも仲間あり。僻遠の村落に至るまでも小民各仲間を結て公私の事務を相談するの風なり。<sup>(57)</sup>

上記引用箇所は第十二編の冒頭とほぼ同じことを述べている。しかし『概略』ではこの「仲間」と衆論の関係が、いわば集団は個々の物（人間）の総和ではなくそれ以上のものである、という関係として論じられている。

既に仲間を分てば其仲間毎に各個有の議論なきを得ず。譬へば数名の朋友歟、又は二、三軒の近隣にて仲間を結べば、乃ち其仲間固有の説あり。合して一村と為れば一村の説あり、一州と為り一郡と為れば亦一州一郡の説あり。比の説と彼の説と相合して少しく趣を變じ、又合し又併せて遂に一国の衆論を定むることにて、其趣は恰も若干の兵士を集めて小隊と為し、合して中隊と為し、又併せて大隊と為すが如し<sup>(58)</sup>（強調は平井による）。

上記軍隊の比喩の示している趣きとは、「大隊の力はよく敵に向て戦ふべしと雖ども、其兵士の一己に就て見れば必ずしも勇者のみに非ず。故に大隊の力は兵士各個の力に非ず、其隊を結たるがために別に生じたるものと云ふ可し（強調平井）」<sup>(59)</sup>である。それでは、この「仲間」が持つ、個々のもの（人）の総和を越えるある力を福沢はどのようなものであると考えたのか。今日の組織コミュニケーションの用語を用いれば、組織におけるリーダーシップのみではなく、フォロアー間の協力関係を認め、フォロアー間に生ずる「議論の勇氣」が、この力なのだと福沢は考えた。

今一国の衆論も其定りたる上にてこれを見れば頗る高尚にして有力なれども、其然る由縁は、高尚にして有力なる人物の唱えたる故のみを以て議論の盛なるに非ず、比議論に雷同する仲間の組合宣しきを得て、仲間一般の内に於て自ら議論の勇氣を生じたるものなり。<sup>(60)</sup>

ここには衆論の形成過程が、その形成に参加するフォロアーの「勇気」の問題と関係づけられている。福沢は西欧社会ではこの「勇気」が機能し、日本社会では、「無議の習慣」<sup>(61)</sup>に妨げられ、これが機能しないと考えた。つまり、衆論（文明社会のメルクマール）が西欧では高尚で、日本では低劣なのは、西欧人個々の智徳が、日本人個々のそれよりすぐれているためではなく、衆論の形成過程において、個々人の総和以上の、いわばプラスアルファをもたらすような、集団としての意志決定が、西欧ではできて、日本ではできないからである。<sup>(62)</sup>

ここには一国の衆論というよりは、一小集団の意見形成のプロセスが論じられているのであるが、このプロセスは、一国の衆論の形成のプロセスでもあると福沢は考えた。「人民の議論も亦斯の如し。毎戸に問ひ毎人に叩けば各所見なきに非ざれども、其所見百千万の数に分れ、之を結合するの手段を得ずして全国の用を為さざるものなり。」<sup>(63)</sup>従って、日本人は、いわゆるかかわり合いになるのを恐れて、道普請の相談もできない、と福沢は続ける。道普請は、福沢がスピーチの書であると考えた『会議弁』における会議のテーマである。このことから福沢の「スピーチ＝演説」観が、日本語の「演説」、あるいは狭義のパブリック・スピーキングの意味するものとは大きく異り、人々を結合し、パブリックとするためのコミュニケーションであったことが推測される。

それでは、福沢は、道普請の相談（パブリック・コミュニケーション）ができるような組織（小さくは一集団、大きくは日本国）をどのようにして創ろうとしたのか。私の考えでは、福沢はこの間に対して、「先ず三田演説会をつくることによって」と答えるのではないかと思う。つまり、文明社会のモデルとしての三田演説会は、高尚な組織者（リーダー）である福沢によって、中程度以上の智力を持つ門下（フォロアー）が、福沢の議論に雷同して（説得されて）組織された組合であり、福沢がそこに期待したものは、「議論の勇気」を媒介とする、高尚な衆論（三田演説会社中、ひいては慶応義塾社中における）の形成であったと思われる。つまりその手段は、今日の用語では、グループ・コミュニケーション、パブリック・コミュニケーション、であった。

このような福沢の「演説」観が正しく継承されていれば、今日、日本社会は現在の姿とは異なるコミュニケーション観とコミュニケーション論とを持てたかもしれない。福沢の「演説」観が、文字通りの演説だの討論だのという、最良の場合でも民主主義の技術論に矮小化され、福沢が考えていたであろう近代市民社会論に結びつけられなかったのはなぜであろうか。

もちろん、この間に対する答えは容易なものではない。しかし答を出すための材料は、以下の福沢に関するコメント二つに見ることができる。一つは福沢の「スピーチュ」に触れたものであり、他は、社会思想家としての福沢への言及である。先ず、波多野完治は福沢の「スピーチュ」に関連して以下のことを述べる。

（前略）わが国においては、コミュニケーション理論ないしレトリック理論はまったく発達していなかった。明治のはじめ自由党が議会の解説（ママ）を主張する前後まで、いわゆるスピーチ、または「スピーチュ」（福沢論吉はこのように書いた）の研究は行なわれなかったのである。<sup>(64)</sup>

波多野が指摘しているように、福沢以前にコミュニケーション理論（思想）が欠如していたことがその答の一部である。しかし同時に波多野によれば、その後スピーチは研究されたのであり、そればかりではなく、私の考えでは、福沢はスピーチ・コミュニケーションを社会発展の主要な要素と考え、これを、先ず慶応義塾社中に、ひいては日本社会に、実践させようとしたのである。ちなみに、この実践ということが、西欧の知識としてのレトリックを明治初期に、『百学連環』中で紹



介した西周<sup>(65)</sup>や、西欧のレトリックを体系的技術として、『公開演説法』と『続公開演説法』において、日本に最初に導入した尾崎行雄<sup>(66)</sup>と異なる点である。

実践的な社会思想家としての福沢の日本における立場は、高島、水田、平田による次の略述にはっきりしている。高島、水田、平田は、「社会思想や社会科学はもともと市民社会の産物である。市民社会のこれというほどの発達が無かったわが国において、社会思想や社会科学の独自の発達がなかったことは別にふしぎとするには当たらないのである。」<sup>(67)</sup>と言い、日本の社会思想、社会科学は本質的に外国から輸入されたものであり、「ここに現代日本の社会思想についての苦悩があるといえるであろう。」<sup>(68)</sup>とつづける。そして、福沢を時代的に筆頭として、数名の思想家の名を挙げ、次のように言う。

これらの社会思想家たちはすべて西欧的なものの考え方によって自己を支え、日本の社会に対決しようとした。その対決のしかたにはそれぞれ個人的なちがいはあっても、西ヨーロッパ的なものをいかに日本の現実に風土化しようかという課題の解決のために生涯を捧げたという意味で、われわれにとりすぐれた模範となっている<sup>(69)</sup>。

伝統的な人文学としてのスピーチ（レトリック）は古代ギリシャ以来のものであるが、社会科学としてのコミュニケーション研究は近代市民社会の産物である。福沢のスピーチ観は、西欧文明の精神を、スピーチ・コミュニケーションという西欧的なものを通して、日本の現実に風土化しようとする 것과深く関係したものであったと言えるであろう<sup>(70)</sup>。この意味で、福沢は「スピーチ」という英語を「演説」と訳すことによって、日本における西洋流演説の創始者となった栄誉よりは、西欧近代社会の特徴を敏感に感じとり、パブリック・スピーキングによって人々をパブリックとして結合させることで日本社会を近代化（福沢によれば、文明化）させようとした、最初の実践的社会思想家であったことの栄誉を与えられるべきであろう。福沢をレトリシャンとして分析することはできるし、またそれは重要なことであると思う。しかし、その場合に、基本的な問題とすべきことは、福沢の文明思想および文明化のための実践活動とコミュニケーションの関係であって、単なる技術論としてのレトリックではないであろう。

## 注

- (1) 「明治七年六月七日集会の演説」『福翁自伝付福沢全集緒言』講談社文庫、1989、p.356.
- (2) 平井一弘「福沢諭吉と演説」『大妻女子大学紀要（文系）』1991.
- (3) 平井一弘「福沢諭吉とコミュニケーション」日本コミュニケーション学会第21回大会発表論文、1991.
- (4) 齊藤毅『明治のことば』講談社、昭和52年、p.396.
- (5) 石井研堂『明治事物起原』明治文化研究会「明治文化全集」別巻、日本評論社、1969、p.43.
- (6) 『慶応義塾百年史』上巻、慶応義塾、昭和33年、p.626.
- (7) 齊藤、前掲書、p.386.
- (8) 同、p.397.
- (9) 同、pp.397-399.
- (10) 前掲（注1）『福翁自伝付福沢全集緒言』p.356.
- (11) 前掲『慶応義塾百年史』上巻、p.638.
- (12) 『福沢諭吉全集』（以降『全集』と省略）第十九巻、岩波書店、昭和46年、pp.758-759.
- (13) 前掲『福翁自伝付福沢全集緒言』、p.355.
- (14) 前掲『全集』第十九巻、p.415.
- (15) 石河幹明『福沢諭吉伝』第二巻、岩波書店、1981、p.277.

- ①⑥ 同, p.188.
- ①⑦ 前掲(注6), p.623.
- ①⑧ 石河, 前掲書, 同.
- ①⑨ 平井一弘「福沢論吉と演説」(前掲).
- ②① 『全集』第三卷, 昭和44年, p.615.
- ②② 前掲(注1)
- ②③ 『学問のすゝめ』岩波文庫, 1983, p.105.
- ②④ 同.
- ②⑤ 同.
- ②⑥ 今日のコミュニケーションでは, あるスピーチがパブリックであるかプライベートであるかの区別を定義的につけることは困難である。それにもかかわらず, ある形式と内容を備えたものを, 私達はパブリック・スピーキングであると考え。例えば以下を参照。Weaver, Andrew Thomas, Gladis Louise Borchers and Donald Kleise Smith. *The Teaching of Speech*, Prentice-Hall, 1963, p.294.
- ②⑦ 『学問のすゝめ』, p.106.
- ②⑧ 同.
- ②⑨ 同, p.107
- ③① 前掲(注1), p.358
- ③② 例えば, 前掲『慶応義塾百年史』上巻, p.623. 及び石河, 前掲書, p.188.
- ③③ 高橋誠一郎『福沢論吉』長崎出版株式会社, 1979, p.115.
- ③④ 妹尾剛光『コミュニケーションの主体の思想構造』北樹出版, 1986, p.18.
- ③⑤ 三戸公「家と『公と私』」『公と私の社会心理学』年報社会心理学第23号, 勁草書房, 1982, p.55.
- ③⑥ 平井一弘, 前掲(注2)論文, p.11.
- ③⑦ 『全集』第三卷, p.616.
- ③⑧ 前掲(注26), p.105.
- ③⑨ 『全集』第19巻, p.414.
- ④① 前掲(注13), p.355.
- ④② 齊藤, 前掲書, p.386.
- ④③ 丸山真男『「文明論之概略」を読む』(上), 岩波新書, 1986, p.82.
- ④④ ジュール・サンジエ(及川馥, 一之瀬正典訳)『弁論術とレトリック』, 白水社, 1986, p.84.
- ④⑤ フランソワ・ギゾー(安土正夫訳)『ヨーロッパ文明史』みすず書房, 1987.
- ④⑥ Henry Thomas Buckle, *History of Civilization in England*, Summarized and abridged by Clement Wood, Frederic Unger Publishing Co., 1964, p.viii.
- ④⑦ F.B. カープ(大橋英寿監訳)『社会心理学の源流と展開』, 勁草書房, 1987, p.166.
- ④⑧ 『文明論之概略』岩波文庫, 1983, p.71. (以降『概略』と省略)
- ④⑨ 前掲(注43), p.x.
- ④⑩ 『概略』, p.72.
- ④⑪ 同, p.76.
- ④⑫ 同, p.91.
- ④⑬ 同, p.93.
- ④⑭ 前掲(注43), pp.44-45.
- ④⑮ 『概略』, p.89.
- ④⑯ 同.
- ④⑰ 同, p.90
- ④⑱ 『福翁自伝付福沢全集緒言』年譜, p.421,
- ④⑲ 『学問のすゝめ』pp.105-106.
- ④⑳ 『概略』p.100.
- ⑤① 同, p.101.
- ⑤② 同.



- 60 同。
- 61 同, p.103.
- 62 同, p.101.
- 63 同, p.102.
- 64 波多野完治「思想というコミュニケーション」江藤文夫, 鶴見俊輔, 山本明(編)『コミュニケーション思想史』研究社, 1973, p.14.
- 65 速水博司『近代日本修辞学史』有明堂, 昭和63年, p.27.
- 66 同, p.41.
- 67 高島善哉, 水田洋, 平田清明『社会思想史概論』岩波書店, 1984, p.377.
- 68 同。
- 69 同。
- 70 従って, 福沢の「演説」の観念は, その外形においては, 明治時代以前にさかのぼってあつづけることもできるであろうし(例えば, 宮武外骨『明治演説史』あるいは波多野, 前掲書), また, 西洋流演説の始まりとすることも可能であろう。また, 外形において福沢のレトリックを西洋流に分析することも可能であろう。しかし, 福沢のその観念を, 思想性において問題にすれば, それは, 明らかに, 明治以前と断絶しているし, 明治以降の日本のコミュニケーションとも大きく異なっているように思える。従って, 後藤宏行(『語り口』の文化史)晃洋書房, (1989)が, 繰り返し, 日本的「マス・ローグ」と福沢の演説観を対比させていることは興味深い。